

(社)地盤工学会関東支部



JGS Kanto

Newsletter

Kanto Branch of Japanese Geotechnical Society

環境修復と災害低減を繋ぐもの

関東支部 副支部長
安原 一哉 (茨城大学)

“環境負荷低減”とか“災害低減”という言葉を使わない日はないくらいに、いまや、時代のキーワードになっている。いずれも、土木工学や地盤工学に密接に関わっている。なのに、どうして、大学の土木系学科の人気の落ち目なのであろうか。最近、入試業務に関わっているせいもあって、良くそのことを考える。大げさに言えば人類の継続的生存に不可欠な2つのことが土木工学の重要な役割だということが一般に広く知られていないとしたら、やはり、土木工学に関わっている我々の努力不足と言われても仕方があるまい。



大学で低学年の学部学生と少人数のゼミナールを行うときにクラスわけをすると、“防災”とか“環境”とかのテーマのゼミナールに結構人気が集まる。

ということは、やはり受験生には土木工学の何たるかがよく伝わっておらず、入学して初めて、そうか、そんなことだったのかと気がつくと言うことであろう。そんなこともあって所属学科では、高等学校からの出前授業とか、模擬授業とかの要請があったら、できるだけ応える様に努力している。そうした地道な努力が土木工学とか、地盤工学への認識を高め、ひいては地域の大学の役割を認知してもらうことができるという一挙両得の効果があると考えているからである。昔の大学事情を知る人の中には嘆かわしい状況になってきた、と首を傾げる向きもあるかもしれないが、これが“大学全入時代”の一側面なのである。

話が飛躍するが、12月上旬から中旬にかけて、タイとシンガポールで“自然災害とその修復”に関する2つの国際会議があった。ともに2日間ではあったが、テーマが限定されていただけに中身は充実していたと思う。2004年から2005年にかけて経験した内外の大きな自然災害を一時的で異常な現象と位置づけるか、どうか、がきわめて重要であるが、異常気象かどうかの予測は困難で地盤工学の分野外の問題だ、と片付けられてしまうことが多い。しかし、果たしてそれでいいのだろうか。このことを明らかにしないまま、災害低減などといって地盤工学技術者のできることはなにか?と問うだけでいいのだろうか。少なくとも研究者は、“この異常が正常になる”と考えて将来起きるかもしれない最悪のシナリオを想定して対応する方策を考えておくべきではないか、というのが今のところの私の結論である。私がリーダーではないが、所属大学の中でそういう方向の教育・研究を推進するための組織作りが進んでいる。“地球変動適応科学研究機関”(Institute for Global Change Adaptation Science、略称、ICAS)と言うのがそれである。

実はほかの事を書こうと思いつきながら、筆を進めているうちに話が思わぬ方向へ行ってしまった。数年前までは、災害と環境の問題は結びつけることはできないものと漠然と考えていたが、実はそうではないことにだんだん気づき始めた。言いたいことはこのことだった。卑近な例をあげるなら、開発途上国の低平地で水害がおきると市街地の汚染につながる、あるいは、温暖化が進むと台風が強大化するか発生頻度が増える、などである。特に後者の地球環境の変動はどうやら災害を進化させる、あるいは、巨大化させることが危惧されている。このことはもっと科学的知見の積み重ねに基づいて発言しなければならないが、先述したように、2004年や2005年に立て続けに起きた大きな災害は、これらの年がunusualではなく、これからは、unusualがusualになることを暗示しているのではないかと考えることもできる。このことをバンコクのシンポジウム“Tsunami Reconstruction with Geosynthetics”での講演で強調した。顰蹙を買うかと思ったが、必ずしもそうではなかった。10年前に、国内の学会で“温暖化が地盤や土構造物に及ぼす影響”について口頭発表したときには多くの人に冷ややかな目で見られ

たり冷やかされたりした。そのときと比べると状況は確実に変化している。また、シンガポールの会議でも ATC3 の委員長の國生剛治教授（中央大学）が“Global warming might increase the damage”と言われた。might と言うのが気になったが、現状ではやむを得まい。いずれにせよ、温暖化というキーワードが地盤工学でも少しずつ受け入れられてきたように感じられた。

さて、そろそろ締めくくりをしなければならない。地盤に関連する環境問題も災害の問題もミティゲーション(Mitigation)という共通するキーワードが使われるようになってきた。最初は環境の分野で使われて来たものが、災害の分野でも使われるようになってきた、と思うが間違っていないであろうか。ただ、環境の修復は、Remediation だが、災害の回復は Rehabilitation と表現されている。この点は少し違っていて、環境の分野では、Rehabilitation とは言わないようである。さらに、地球環境分野では、防止対策から適応策に考え方が変わりつつある。ある程度の変化は受け入れよう、しかし、それはどこまで許容されるのか、それを考えようと言うわけである。そして、その適応策も地域や国によって違うであろうから、そのことを十分踏まえて提言していこう、というのがわが国における地球環境研究の基本姿勢のようである。自然災害についても同様ではあるまいか。災害低減とは、それぞれのサイトの事情に応じて対応・適応をしていこう、そのために少し広い領域（少なくともアジア全体）で協力し合うことで達成される、ということではないか。その中には該当する人間が視野に入っていなければならない。今回の両方の会議に出席された太田秀樹会長は“災害とその修復”についてそのこと（アジア地域で協力し合うこと）の重要性を強調して、各国の主要な方々に問いかけられていた。その努力が出るだけ早く日の目を見るよう、その成功を心から祈りたい。ことは、それほど猶予を許される状況ではないと考えるからである。また、一研究者・技術者として、できることは小さいが、その方向で精一杯努力したい、と思っている。（2005年12月14日、機中にて）

Geo-Kanto2005(第2回関東支部地盤工学研究発表会)報告

支部研究発表会グループリーダー幹事
村上 哲（茨城大学）

平成 17 年 11 月 25 日(金)茨城大学インフォメーションセンター(水戸市)において、Geo-Kanto2005（第2回関東支部研究発表会）が開催されました。この研究発表会は、第1回より、従来型の研究成果の発表に加えて、若手技術者や学生会員を中心とした情報交換や意見交換ができる場を提供し、実務における重要な課題を若い会員に紹介していただく機会と位置付けられています。

第2回、しかも、第1回の開催（平成17年3月4日、JGS会館）からおよそ半年近くの東京以外の地域で開催ということもあり、企画・運営において、十分な準備ができず、発表者および参加者の方には、大変ご迷惑をおかけしたと存じます。この場を借りて、深くお詫び申し上げます。

今回より、関東支部研究発表会では、特定のテーマと地盤工学全般と両方の発表論文募集を行うこととしました。この Geo-Kanto2005 では、「環境技術」というテーマを掲げ、これに「地盤工学全般」との2つの分野から論文募集を行いました。おかげさまで、環境技術分野で 18 編、地盤工学全般の分野で 34 編、合計 52 編の応募があり、Geo-Kanto2005 発表会講演概要集として発刊することができました。これは、第1回発表会の 26 編の丁度2倍に相当する論文数であり、本発表会の知名度が少しずつではありますが、関東エリアにおきまして、認知されつつあると嬉しく思っております。また、投稿原稿は、原稿のページ数は 1 編につき最大 4 ページとし（1ページの概要版や奇数ページでも OK）とし、会員のみならずが投稿しやすいよう配慮されていることを付記しておきます。

発表会は、参加者 80 名（発表者含む）を数えることができ、2会場で午前と午後の合計 8 セッションにおいて、52 編の口頭発表が行われました。発表者の平均年齢は 27 歳、30 歳未満の発表は 40 編と本発表会が掲げる「若手技術者や学生会員を中心とした情報交換や意見交換ができる場の提供」になりつつあることを予期するものでありました。質疑時間の関係からか、議論が活発に行われたかということ、必ずしもそうでない場合もあり、今後は、意見交換が活発となるような発表会の企画・運営を心がけていきたいと思っております。表 - 1 が本発表会プログラムのセッションと座長名を示したものです（関東エリアから広く参加しやすいよう 10 時開始としています）。また、発表題目については、紙面の都合上割愛させていただきますが、関東支部ホームページ（<http://www.jiban.or.jp/kantou/index.html>）より閲覧することが可能です。

また、優れた発表および論文（30歳未満の発表者を対象）について、関東支部より優秀発表（論文）

賞の表彰をさせていただきました。表 - 2 が受賞者の一覧です。この場を借りてご報告申し上げます。
 次回、Geo-Kanto2006（第3回関東支部地盤工学研究発表会）は、横浜市にて開催する方向で地盤工学関東支部研究発表会グループにて準備を始めています。次回発表会については、学会誌会告と学会メーリングリストによりご案内させていただく予定です。
 今後とも、この発表会に甚大なるご協力とご参加をお願い申し上げます。



Geo-Kanto2005の様子

表 - 1 Geo-Kanto2005 プログラム概要

時間	第一会場(301 講座室：定員 72 名)	第二会場(302 講座室:定員 48 名)
10:00-10:10	【開会挨拶】 地盤工学会関東支部長 石原研而	
10:15-12:00	【地震・液状化】7 編 座長：規矩大義（関東学院大学）	【試験法】8 編 座長：土倉 泰（前橋工科大学）
13:00- 15:00	【リサイクル*】7 編 座長：小峯秀雄（茨城大学）	【数値解析】8 編 座長：村上 哲（茨城大学）
15:15-16:30	【水質・環境振動*】5 編 座長：杉山太宏（東海大学）	【原位置試験】5 編 座長：斎藤邦夫（中央大学）
16:45-18:15	【汚染・浄化*】6 編 座長：石井武司（日建設計シビル）	【地盤改良】6 編 座長：水谷崇亮（港湾空港技術研究所）
18:30-20:00	【表彰式・交流会】 司会：関東支部評議員 斎藤邦夫	

*は環境技術に関するセッション

表 - 2 優秀発表賞一覧（敬称略）

受賞者	論文題目
富田佑一（東京理科大学）	破碎コンクリートの変形強度特性の拘束圧依存性
大森慎哉（茨城大学）	一次元膨潤試験装置による堆積性軟岩の劣化特性と水質影響の定量評価
川浪聖志（明治コンサルタント）	現地試験に基づいたバイオレメディエーションの可能性評価
山口知之（横浜国立大学）	砂層中を移動する懸濁粒子の観測システムの考案
佐藤和正（筑波大学）	透過型土石流対策工に関する基礎的検討
樺沢祐樹（群馬高等専門学校）	画像処理による浅い基礎の支持力メカニズムの検討
諏訪裕哉（武蔵工業大学）	薬液改良体の強度特性に及ぼす薬液ゲル収縮性の影響
藤原聡（東京理科大学）	地震動に関する諸因子が液状化時の直接基礎の沈下挙動に及ぼす影響

「土石流対策堰堤工事外現場見学会」報告

栃木県グループ幹事
川上 和彦（栃木県土木部）

栃木県グループでは、平成17年11月16日(水)に、栃木県建設技術協会、土木学会関東支部栃木会及びCCIとちぎとの共催により、国土交通省関東地方整備局日光砂防事務所が実施している、砂防工事の現場見学会を開催しました。

全体の参加者は89名であり、寒い中ではありましたが、熱心に関係者の説明を聞いたり現場を観察したりと、大変有意義な1日となりました。当日は、工事発注者である国土交通省関東地方整備局日光砂防事務所において担当職員の方から工事概要の説明を聞いた後、参加者が多かったことから、2台のマイクロバスに分乗し2班に分かれて、大谷川の支川である稲荷川上流における山腹工事と野上沢における堆積土砂の流出を防ぐための砂防堰堤工事の2箇所を見学させて頂きました。



現場見学会の様子

山腹工事の現場である稲荷川の水源となる女峰山(2,464m)及び赤薙山(2,010m)は、日光火山群の中でも最も形成年代が古い山であり、もともとは一体であったものが火口壁の決壊や浸食によって二つの峰に分かれたと推測されています。

稲荷川は、この火口瀬から生じていることから上流部は特に急峻地帯やY字峡が多く、崩壊地が続いていることから、崩壊を押さえるために法枠工や植生工を実施しているとのことでした。

堰堤工事については、現場である野上沢が平常時は流水も無くいたって平穏であるのに、一度雨が降るとそのまま雨水が浸透もせず流れ出してしまうため、集中豪雨や台風などの異常気象による土石流災害を防ぐため、砂防堰堤工や法面植生工を実施しているものでした。

砂防工事の現場見学の後に、栃木県が平成9年度から実施していた修復工事が平成15年度に完了し、一般公開されている旧日光田母沢御用邸記念公園を訪れ、歴史と文化の香り溢れる御用邸の建物や庭園等の見学などに、ゆったりとした時間を過ごすことができました。

最後になりましたが、国土交通省日光砂防事務所の職員の皆様を始めとして、見学会に携わった多くの方々に深く感謝を申し上げます。

「17年度東京都防災展」に協力する

企画総務グループ幹事
高橋 一紀

都民の防災意識の高揚と防災知識の普及・向上を図ることを目的とする、毎年恒例の東京都主催の防災展が、平成17年8月23～26日の4日間にわたって、新宿駅西口広場イベントコーナーにおいて開催され、地盤工学会関東支部はこれに初めて協力参加しました。

今年の防災展は「私たちの命を地震から守るためにはどう取り組むか」というテーマに基づいた展示・説明と防災講座が主な内容でした。参加協力団体は、当支部のほか、東京都道路整備保全公社、東京都地質調査業協会、関東地質調査業協会、東京都葛飾福祉工場、東京消防庁、東京都建築士事務所協会、東京建設業協会、東京電力、NNT 東日本、NTT ドコモ、KDDI、ボーダフォンと多岐におよびました。これら各団体によって、起震車による地震体験、家具の転倒防止対策、安否情報確認、耐震診断・補強相談、防災用品の展示販売、地震被害のパネル展示、自主防災組織・復興市民組織の紹介などが展

示され、救命講座、住宅・宅地の地震被害、液状化実験、首都直下型地震に関する講演などが行われました。

連日、猛暑の中、主婦、サラリーマンなど多くの一般市民が来場され、熱心に展示を見たり、スタッフの説明を受けたりしていました。特に初参加となる建設業協会、建築士事務所協会ならびに通信各社は熱心で、相談コーナーを設けたり、動く模型を展示したり、KDDI、携帯電話などは説明要員として女性コンパニオンを配置するほどでした。こうした相乗効果や事前の広報が功を奏して、例年より多くの市民が来場されたようです。

地盤工学会関東支部としては、東京都地質調査業協会と連携・協力し、防災講座の講師派遣（建築研究所 国際地震工学センター 田村昌仁博士）という形で参加しました。また、東京都地質調査業協会のコーナーに関東支部のパンフレット、ニューズレター（最新号）を200部づつ置かせていただいたところ、最終日を待たずに品切れとなりました。

防災講座もきわめて盛況で、市民を中心に席が埋まり、田村先生の講座も含めてすべての講座は立ち見が出るほどでした。各講師の方々も汗を拭きながら熱弁をふるっていただき、市民向けのわかりやすい説明はどれも好評でした。今回の田村先生の講演は、「住宅・宅地の地震対策」と題して、地震で被害を受けやすい住宅の箇所、宅地の場所、地震対策の方法などを1時間にわたって、わかりやすく説明して頂きました。

途中、大型台風の襲来もありましたが、全体に円滑な運営がなされ、盛況のうちに無事展示会を終了することが出来ました。

地盤工学会関東支部としては、今後も自治体への協力を積極的に行い、より良い企画をしていくつもりですので、ご支援、ご協力のほどよろしく願いいたします。

最後になりましたが、今回の講演を快くお引き受けくださった田村先生に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

東京都港湾局の職員研修への協力

関東支部 副幹事長
山崎 晶（株）熊谷組

平成17年9月22日に、東京都港湾局技術系職員への土木設計に関する実務研修が、地盤工学会関東支部の協力のもと、東京都港湾局東京港建設事務所にて開催された。講師は、国土交通省国土技術政策総合研究所 港湾施設研究室長 長尾 毅氏で、「港湾施設の耐震設計における性能設計について」のテーマにて、約50名の東京都港湾局の職員が出席した。港湾施設の設計基準である「港湾の施設の技術上の基準」（日本港湾協会）が平成18年度初めに改訂される予定であるが、長尾室長は改訂作業の中心人物であり、東京都港湾局からの強い要望により長尾氏を講師とした本研修会が実現した。地盤工学会は、東京都港湾局の意向に沿って、希望するテーマに対する講師選任と依頼を担当した。



講師の長尾氏

講義は「性能設計への移行の背景」から始まり、次期基準における「性能設計の体系」や「信頼性設計法の導入」、更には「耐震設計を行う上での留意点」について扱い、最後に今後の展開について触れていただいた。テーマが来年度改訂される技術基準に関することであり講義後には多数の質問があり、長尾室長には理論的かつ大変丁寧に各質問への回答をしていただいた。そして、最新の知見を聞かせていただいたお礼と今後ともご指導をお願いしたいとの要望が東京都港湾局幹部より述べられ、多数の参加者からの拍手で研修会を終了した。

関東支部では、自治体をはじめとする官庁関係機関との連携強化を目指して、こうした職員研修や市民講座・防災講座の開催への協力を行うと共に、地盤工学上の課題を有する実施中のプロジェクトを対象に事業実施機関関係者を交えた技術交流会を実施している。更に今後は、各機関が直面している地盤

工学上の課題を研究委員会等でテーマとして取り上げ検討することも実施したいと考えている。こうした活動を通じて地盤工学会の存在・役割をよく認識していただき、官庁関係機関やその所属の技術者の方々に、積極的に学会活動に参加していただきたいと希望している。

土構造物の品質評価と性能設計 - 土構造物の品質評価に関する研究委員会報告 -

会員サービスグループリーダー幹事
野津 光夫（不動建設㈱）

平成 17 年 9 月 27 日午前 10 時より、JGS 会館において、関西支部の後援のもとで、「土構造物の品質評価に関する研究委員会報告」が開催されました。

近年、WTO/TBT 協定に代表されるグローバル化の波の中、設計法自体も仕様設計から性能設計に大きく切り替わろうとしています。地盤工学会関西支部では、時間経過も視野に入れた土構造物の品質と性能設計の関係模索をテーマに、平成 13～15 年度の 3 年間、「土構造物の品質評価に関する研究委員会」の活動を行ってきました。また平成 16 年度には、研究委員会の報告に加え、土木学会や地盤工学会などで、性能設計コードの整備に中心的な役割を果たしておられる方々を講師にお迎えし、土構造物の性能設計について考え、議論する講習会を大阪市で開催しております。上記講習会が好評なことから、再度東京にて同様の講習会を開催していただくことを企画したものです。

当日は、最近の設計基準類における性能規定化の動きもあって、65 名の参加者があり、質疑応答も活発なものでした。また最後に飯塚委員長から、「性能設計とは技術者も設計結果に対する説明を求められていること」というわかりやすい説明と、熱心な解説がありました。それに対し、フロアからは、「地盤工学会も社会に対し、今後もっと PR すべきでは」などの意見が出されました。

最後に、基調講演いただいた講師の方々、また大阪から駆けつけていただいた関西支部の講師の方々に厚く御礼申し上げます。

今後の反省として、下記講演のプログラムが「土と基礎」会告欄に漏れており、参加者募集に影響を与えた可能性がありました。今後留意したいと思います。

プログラム：	
10:00～10:10	開会挨拶 地盤工学会関東支部 斎藤邦夫評議員
	・基調講演：テーマ 土構造物の性能設計
10:10～11:10	地盤構造物における性能設計と信頼性設計 本城勇介（岐阜大学）
11:10～12:10	鉄道における土構造物の性能設計への取り組み 館山 勝（財）鉄道総合技術研究所）
13:00～14:00	高速道路の土構造物における性能設計と品質評価 川井田実（日本道路公団試験研究所）
	・委員会報告：テーマ 土構造物の品質評価
14:20～14:50	土構造物の品質評価 武田 弘一（元大阪市）
14:50～15:20	土構造物の品質評価における調査・計測のポイント 柳浦 良行（基礎地盤コンサルタンツ㈱）
15:20～15:50	土構造物の品質評価における土/水連成解析のポイント 飯塚敦（神戸大学）
15:50～16:30	質疑応答とディスカッション 司会 飯塚敦（神戸大学）

新技術・新工法に関する第 1 回技術相談の実施報告

プロジェクト対応グループリーダー幹事
古関潤一（東京大学）

プロジェクト対応グループでは、特別会員を対象とした新技術・新工法の評価と普及方策に関する本年度第 1 回目の技術相談を 11 月 1 日（火）に実施しました。関東支部 HP と特別会員向けメーリング

リストで実施案内をお知らせした結果、応募されたのは以下の2特別会員でした。事前に提出していただいた技術の概要・自己評価と普及活動の経緯、論文発表・特許の有無等の資料に加えて、当日は10分程度のプレゼンテーションを担当者のかたに行っていただき、その後20分程度、評価や普及方策について出席者間で自由討論しました。関東支部からはプロジェクト対応グループのメンバー全員（三木・堀越・松本・小島・古関）が出席しました。

大日本土木株式会社（ハイビーウォール工法・ミニアンカー工法）
清水建設株式会社（新杭頭接合工法：「杭頭ピン工法」）

この技術相談は、すでに公開されている新技術・新工法を対象に実施するもので、あくまでもボランティアベースの「相談」です。お墨付きとして使えるような「審査」・「評定」ではありません。第1回終了後にプロジェクト対応グループで議論した結果、次回からは「（開発途上の技術・工法の）開発方針」についても相談の対象にすることにいたしました。

第2回は2006年2月下旬または3月に実施する予定です。詳細については関東支部HPとメーリングリストで後日改めてお知らせいたします。

横浜市職員研修に協力

神奈川県グループ幹事
田中 洋輔（東亜建設工業㈱）

2005年7月29日、13:30~17:15に、「地震に強いヨコハマにするために」というタイトルの横浜市職員研修が実施されました。これは、横浜市総務局人材開発課より神奈川県グループに対して協力依頼があり、今回初めて実現したものです。神奈川県グループは、研修内容の企画・構成、講師派遣を協力しました。研修には111名という多数の市職員が受講されました。

研修では、太田陽子先生（横浜国立大学名誉教授）、長島一郎氏、志波由紀夫氏（ともに大成建設（株）技術センター）、佐土原聡教授（横浜国立大学大学院）をお招きして、「横浜市に影響を与える活断層」、「最新の耐震設計と技術」、「ソフト面を含めた災害予測とGIS（地理情報システム）」について講義されました。

太田先生は、横浜市に影響を与える活断層、活断層の特性、活動期、活断層による断層直上・周辺の被害の様相について説明されました。特にニュージーランドの活断層を考慮した街づくりの紹介は大変印象的でした。

長島氏、志波氏は、耐震設計の変遷、長周期地震動、地震被害の予測、免震技術、液状化シミュレーション、今後の地震対策のあり方について説明されました。その中で、中越地震発生時の小千谷市内の病院の免震対策効果の事例について取り上げ、免震技術の有効性を示されました。

佐土原先生は、兵庫県南部地震や最近の新潟県山古志村の被災の様相と現状について説明され、これらの災害予測・対策においてGISの活用が必要であることを主張されました。また、GISのデモンストレーションを示され、GISの災害に対する有効性、GISの活用事例（新潟県中越地震の例）や今後の方向性について説明されました。

各講義とも充実した内容で、受講生は興味深く聴講されました。

研修終了後に、受講生に対して行われた研修内容に関するアンケート結果に対して、講師の方々と意見交換が行われました。アンケートでは、行政に携わっておられる方々からの地盤工学会に対する期待・要望を直接聞くことができました。大変、充実した研修となりました。

今回の活動は、今後の学会と行政の関わり方に大いに参考になるものであり、今後も継続してゆきたいと考えています。



太田先生の講演

アフター 5 特別講演会 「巨大地震時の広域地盤沈降の事例と防災の取組み」開催される

会員サービスグループリーダー幹事
野津 光夫（不動建設㈱）

平成 17 年 9 月 27 日午後 6 時から JGS 会館において、国際部との共催で、アフター 5 特別講演会を開催しました。これはアフター 5 談話会の時間枠を用いたもので、参加者は 25 名でした。講師として、チリ バルディビア大学の Mr. Felipe Villalobos、東京大学の東畑郁生教授、東京電機大学の安田進教授をお招きし、巨大地震時の地盤災害の事例と防災上の意義について、貴重かつ有益なお話を伺いました。具体的には、1946 年高知、60 年チリ、90 年フィリピン、99 年トルコなどの広域地盤沈降の被害事例とそのメカニズム、社会への影響について詳しいご説明をいただき、大変有意義なものでした。特に、地震後に内陸部で発生する広域地盤沈降（プレートの沈み込み）が、高知とチリで見られたという点に興味を引かれました。

今後もこのような既成の枠にとらわれない自由な試みを企画していきたいと思います。最後に、講演いただいた講師の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 17 年度第 2 回評議員会が開催される

関東支部 副幹事長
山崎 晶（㈱熊谷組）

平成 17 年度第 2 回評議員会が、53 名の評議員の出席（代理・委任状も含む）を得て、平成 17 年 10 月 17 日 16:00～18:00 に JGS 会館で開催された。冒頭に石原支部長より、「関東支部は発足後 1 年半が経過したが、発表会・講習会・講演会・見学会などの行事に加え 4 つの研究委員会での調査研究活動など活動の幅が広がっている。今後は、自治体などの官庁機関に対して、職員研修や市民・防災講座等の開催等を通じて、連携を深めていきたい。また、支部発足来取り組んでいる特別会員拡充活動にも注力したい。」との挨拶があった。議案としては例年どおりの「役員の変動による変更」



評議員会の状況

「上期活動報告と下期活動予定（案） 期末収支見通し」に加えて、来年度より導入される代議員制に関して「代議員制の導入及び支部推薦代議員選出方針（案）」が、また今年度末に迎える役員改選期にあたって活動の継続性と活性化を両立させるための「H18 年度支部役員選出方針（案）」の 4 つの議案が報告・提案され、原案通り承認された。

引き続き、支部の研究委員会で検討された「首都圏直下地震に対する地盤工学からの提言（案）」について末岡副支部長が司会をして、國生剛治委員長（中央大学）から内容の報告があり、提言の活かし方や広報の方法などについて熱心な質疑応答があった。加えて、評議員及び評議員所属の組織より提言について忌憚りの無い意見を提出して頂きたい旨のお願いがあった。当日は、自治体関係の評議員の方にも多数出席いただいております。提言（案）に対する組織としてのコメントも得られることが期待される。

地盤の調査技術に関する研修会 (地盤の調査計画から調査結果の解釈及び解析まで) 開催報告

群馬県グループ 幹事
小山田 吉孝(地域計画㈱)

地盤工学会関東支部が発足して2年目を迎え、各県グループとも活発に活動される中、当群馬県グループにおいても地域に根ざした活動を活性化させ、会員サービス強化を図るために、下記の内容で「地盤の調査技術に関する研修会」を主催いたしました。地盤工学に関わる諸問題は、他の専門分野に比較して産官学の多くの技術者が共に取り組みやすい共通の分野であり、以下の団体の共催、後援をいただき開催することができました。心から御礼を申し上げます。



研修会の状況

当日は100名余りの参加があり大盛況でした。参加者の内訳は県市町村の技術者が約1/3、残りは共催及び後援の関係者を含む技術者でした。このような研修会を継続して行い、地域の地盤を自らが熟知し、自らが問題解決するという意気込みで情報を提供しながら、会員の増強と会員サービスの一層の向上を図っていきたいと考えています。

共催 土木学会関東支部群馬会、(社)群馬県測量設計業協会、(社)群馬県建設業協会

後援 (財)群馬県建設技術センター

期日 平成17年11月18日

場所 群馬建設会館(群馬県前橋市)

プログラム

09:30~09:40	開会の挨拶	坂尾 博秋(財)群馬県建設技術センター事務局長)
09:40~10:00	研修会趣意	鶴飼 恵三(群馬大学工学部建設工学科教授)
10:00~11:00	地盤工学と調査技術	小山田吉孝(地域計画㈱ 代表取締役)
11:00~12:00	地盤調査と土質試験	櫛谷 富生(三陽測量㈱ 技術部長)
12:00~12:15	質疑応答	
13:15~14:15	地盤調査と試験の計画	栗原 誠(プロファ設計㈱ 構造部次長)
14:15~15:15	調査結果の適用と解釈	樋口 邦弘(㈱黒岩測量設計事務所 専務取締役)
15:30~16:30	高度地盤解析	若井 明彦(群馬大学工学部建設工学科助教授)
16:30~16:50	質疑応答	
16:50~17:00	閉会の挨拶	若井 明彦(群馬大学工学部建設工学科助教授)

新入会特別会員の紹介

新たに地盤工学会に入会された特別会員24団体を以下にご紹介いたします(関東支部エリア、入会申し込み中も含む)。今後とも会員の皆様に満足いただける支部運営に努めて参りますので、未永くご支援いただきたくお願いいたします。特別会員に所属の方は、学会行事に会員資格で参加できますので、奮ってご参加ください。

- ・ 埼玉県地質調査業協会(4級)
- ・ (有)伊藤地質調査事務所(4級)
- ・ 筑波大学地盤工学研究室(4級)
- ・ 東京理科大学理工学部土木工学科土質研究室(4級)
- ・ 協同組合 地盤環境技術研究センター(4級)
- ・ ヨーコン㈱(4級)
- ・ 東京電機大学(4級)
- ・ 関東地質調査業協会(4級)
- ・ 中央大学地盤環境研究室(4級)
- ・ 真空圧密技術協会(4級)

- ・ソルバック協会（４級）
- ・国土交通省横浜国道事務所（４級）
- ・国土交通省関東地方整備局宇都宮国道事務所（４級）
- ・国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所（４級）
- ・国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所（４級）
- ・国土交通省関東地方整備局荒川下流河川事務所（４級）
- ・国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所（４級）
- ・(株)UR リンケージ（４級）
- ・スペック(株)（４級）
- ・(財)防衛施設技術協会（４級）
- ・国土交通省関東地方整備局道路部（４級）
- ・国土交通省関東地方整備局企画部（４級）
- ・昭和シェル石油(株)（３級）
- ・日本石灰協会（４級）

【行事報告】

特別講演会「History and Restoration of Leaning Tower of Pisa」：9月17日、東京大学弥生講堂
 第9回ジオシンセティックス入門セミナー（共催）：9月20日、日本大学理工学部1号館
 土構造物の品質評価と性能設計 - 土構造物の品質評価に関する研究委員会報告：9月27日、JGS会館
 アフター5特別講演会「巨大地震時の広域地盤沈下の事例と防災の取組み」：9月27日、JGS会館
 横浜環状鉄道、駒林工区（シールド工法・山岳工法の切替え部）の現場見学会：9月30日、横浜地下鉄駒林作業所
 東京国際空港の新規拡張事業及び拡張工事に伴う施設沈下対策の現場見学会：10月14日、東京国際空港
 関東支部会員のための「地盤調査の実務」講習会：10月14日、JGS会館
 第32回アフター5談話会「リサイクル材料の地盤材料としての港湾工事への適用」：10月21日、JGS会館
 地盤工学を学ぶ「第2回地盤工学会栃木県グループ講習会」：10月21日、足利市
 新技術・新工法の評価と普及方法に関する技術相談会：11月1日、JGS会館
 地下鉄13号線建設工事から発生する建設泥土のリサイクルプラントならびに流動化処理土施工現場見学会：11月2日、新木場および新宿
 福岡先生国際地すべり学会バーズ（Varnes）メダル受賞記念会：11月16日、JGS会館
 栃木県建設技術協会現場見学会：11月16日、日光市
 第33回アフター5談話会「環境科学と工学のはざま」：11月18日、JGS会館
 地盤調査技術に関する研修会「地盤の調査計画から調査結果の解釈および解析まで」：11月18日、前橋市
 関東支部地盤工学研究発表会（Geo-Kanto 2005）：11月25日、水戸市
 特別企画講演会「住まいと健康について」：11月25日、前橋市（後援）
 第34回アフター5談話会「産業副産物のリサイクル例-浚渫粘土埋立地利用のための課題と検討方法-」：12月2日、JGS会館
 特別講演会「パキスタン（ムザファラバート）の地震報告会」：12月19日、JGS会館

【行事予定】

赤木俊允先生翻訳テルツァギー先生伝記発刊記念特別講演会：1月11日、JGS会館
 第35回アフター5談話会「扁平な断面のシールドトンネル」：1月27日、JGS会館
 特別講演会「東京国際空港地盤改良等の変遷と設計に関する最近の話題について」：2月17日、JGS会館

編集後記

編集を終え、数多の行事が催されたにも関わらず一つも参加していないことに気がきました。有意義な行事が多いただけに残念ことをしたと思います。来年は積極的に参加することを誓い、また、皆様の積極的な参加とご健康を願い、編集後記とさせていただきます。

(樋口佳意：企画総務グループ幹事)

発行 社団法人 地盤工学会関東支部
 〒112-0011 東京都文京区千石4丁目38番2号 TEL03-3946-8670 FAX03-3946-8678
 E-mail : jgskantou@jiban.or.jp URL : <http://www.jiban.or.jp/kantou/index.html>